【実践報告】

イングリッシュ・センター教員による遠隔英語授業

島﨑 治子
岐阜大学教育推進・学生支援機構

要旨

2020年度に実践された岐阜大学イングリッシュ・センター教員による全学共通英語授業について，量的・質的データを用いて分析し，報告する。学生の成績に関して，前年度と2020年度の平均に差があるかどうか，対応のない*t*検定を用いて確認した結果，有意差が見られ，遠隔授業時の学生成績が対面授業時を上回った。その要因を探るために，同僚による遠隔授業観察レポートと学生アンケートの質的データを用いた。また，計量テキスト分析の結果，対面授業と同様にインタラクティブな遠隔英語授業が実施できていることが明らかになった。イングリッシュ・センター教員による授業には，よく練られた教材，豊富なインタラクション，Web会議アプリ（Zoom）を活用するために必要な教師の授業技術の３要素が存在している。

キーワード：遠隔授業，大学全学共通教育，インタラクション，質的・量的研究，
授業研究

１．背景

2020 年度はコロナ禍により他の多くの大学と同様に，岐阜大学イングリッシュ・センターにおいても，急きょ遠隔授業の体制を整え，全学共通英語教育の授業を行なうこととなった。本学イングリッシュ・センター教員による 2020 年度の遠隔授業に特徴的だったことは，コロナ禍以前と同様に，専任と非常勤の英語教員間で密に連携を取り，オンラインによる研修と定期的かつ頻繁な会合を設け，学び合いを重ね，統一性が極めて高い授業を実施したという点である。機動的かつ組織的に非常事態に対応することができていた。そして，可能な限りインタラクティブな遠隔授業を実施した結果，昨年度の通常授業時と変わらない教育の質を保持できたことを，一教員による授業を例に挙げて報告する。本実践報告の目的は，授業を省察することにより更なる授業改善につなげること，本学イングリッシュ・センターの取り組みを広く知ってもらうこと，インタラクティブな英語遠隔授業の実践に着目し，その意義を考察することの３点である。

２．インタラクティブな授業

最初にインタラクティブな英語遠隔授業が成立するために必要な要素について，考察する。言語を習得するためには目標言語のインプットを豊富に得ることが基本となり，中でも理解可能なインプットが重要であるとKrashen（1985）は述べている。ただ単に目標言語を聞き流したり，目で追ったりすれば自然に習得できるのではなく，また，辞書などに頼ることにより長い時間をかけて少量のインプットしか得られない学習状況を続けるのでもなく，現時点で自分の保持している能力を用いて意味が理解できる内容のインプットを大量に得ることにより言語の習得が進むことが明らかにされている。インタラクション（相互交流）仮説は，Long（1983, 1996）が提案した第二言語習得モデルであり，それによるとインタラクションがインプットの理解を助けると考えられている。インタラクティブな英語授業とは，インタラクション重視の英語学習法を取り入れたものであり，そこではグループワークの意義が認められている。Long & Porter（1985）によると，グループワークの意義は次のようにまとめられる。

1) 言語使用の機会を増やす
2) 学習者の対話の質を改善する
3) 個別指導を促進する
4) 情緒的に安心できる雰囲気を作り出す
5) 学習者の動機を高める

これを元に考えると，インタラクティブな英語授業とは，次の条件を満たすものだといえる。

a) 言語使用の機会が多い
b) 学習者の対話の質が改善されうる
c) 個別指導が促進されうる
d) 情緒的に安心できる雰囲気が作り出されている
e) 学習者の動機を高められている

対象となるイングリッシュ・センター教員による遠隔英語授業において，これらの条件が満たされているかどうか，後章にて検証を試みる。

３．岐阜大学イングリッシュ・センター

岐阜大学では教育推進・学生支援機構イングリッシュ・センターが中心となり，全学共通英語授業のカリキュラムを統一し，授業の質の向上や教材開発に取り組み，実践に即した英語教育を展開している。英語１（スピーキング），英語２（リスニング），英語３（リーディング），英語４（ライティング）の４科目において，全て共通のシラバス，教材，評価基準を用いて教えられており，全ての担当英語教員が，同じ目的を持ち，同じ教科書

を使って授業を行い，同じ試験を実施し，同じ基準で評価しているという，日本の大学において数少ない名目通りの「統一カリキュラム」の実践校の一つである。

2020 年度は，専任教員６名，非常勤講師８名の計 １４名でプログラムを運営している。一人一人の担当コマ数が４～８コマと多く，比較的少人数体制で運営しているため，共通のオフィスを持つ専任教員間は元より，非常勤講師とも授業のための研修や打ち合わせを行なったり，試験などの連絡事項を伝えたりするなど授業を統一的に行うことが可能になっている。対象は全学部（教育，地域科学，医学，工学，応用生物科学）の１・２年次の基礎英語教育であり，2020 年度前期の履修学生数は 2576 人，履修授業数は 84，後期はそれぞれ 2331 人，78 と大人数を対象としたプログラムである。

４．2020年度の遠隔英語授業

2020 年度前期は全て遠隔授業（リアルタイムのオンライン形式），同年度後期は遠隔授業と対面授業を隔週で実施するハイブリッド形式となった。前期の第 1～3 週目は，Zoom（Web 会議アプリ）導入以前であり，AIMS-Gifu (Canvas)と Microsoft Stream を用いたオンデマンド型で授業を配信した。AIMS-Gifu (Canvas)とは，コロナ禍以前から岐阜大学内に整備されていた Web (e-Learning) を利用した本学学生の学習を支援するオンラインシステムである。Microsoft Stream は，学内のユーザーが動画を安全にアップロード，視聴，共有する際に使用できるビデオサービスである。イングリッシュ・センター専任教員が AIMS-Gifu 上にオンライン課題を作成し，授業毎に学生が課題に取り組み，各担当教師に電子的に提出できるようにした。その際に工夫したことは，多くの課題は学生が自律学習できるような完結型にした一方，各担当教員とコミュニケーションが取れるような相互発信型の課題を組み入れたことである。例えば，第１週目の授業に向け，非常勤講師を含む全担当教師が自己紹介ビデオを作成して Microsoft Stream にアップロードし，学生が自由に視聴できるようにし，その内容に関する課題を AIMS-Gifu にて出題するなどした。学生が送ってきたメッセージに対し，各担当教師が返信をするように促した。なお，オンライン課題は対面授業と同様の進度と難易度を持つようにし，例年と授業内容が同一になるように留意した。

前期の第４～１５週目は，Zoomを導入し，同時双方向発進型の授業を実施した。当初はイングリッシュ・センター専任教員間で試行錯誤を重ね，特に非常勤講師に対しては，個別，あるいは小グループで研修を実施したことにより，限られた期間で全員がZoom授業を効果的に行うことができるようになった。研修には，開講前の丸２日間と毎週２回のZoom定例会議と，更に必要に応じてそれ以上の時間を費やした。各教師は自身の能力に応じて研修に参加したため，ITに強い教師は短時間の研修と定例会議での情報交換のみ参加し，ITを不得意とする教師には特に手厚いサポートを行なった。イングリッシュ・センターは教師教育にも積極的に取り組んでいる。

定期試験も遠隔で実施することとなり，スピーキングの授業では個別にインタビューテストを行なった。全てのインタビューテストをビデオ録画し，予め策定してあるルーブリックに基づき担当教師が成績を判定し，それを更にイングリッシュ・センター専任教員間で協議した上で成績を確定するという手順は例年通りに実施された。しかし，例年はスピーキング授業を担当した教師以外の教師によるインタビューテストを実施しており，それにより成績判定の際に更なる公正さが担保できると考えているのだが，今年度は，Zoomの利用による煩雑さと混乱を回避するため，通常の授業担当教師によりインタビューテストが行われた。リスニングの試験は，AIMS-Gifuを用いて例年通りの形式のリスニング試験と筆記試験が行われた。リーディングの試験も同様に，例年通りの形式の筆記試験がAIMS-Gifu上で行われた。リスニングのディクテーションの問題は各担当教師が手動で採点したが，それ以外のリスニング試験問題とリーディング試験問題は，ほぼ自動採点できたことは例年と異なる点であり，教師間での評判が良かった。ライティングは例年通りの課題をオンラインで提出させ，例年通りのルーブリックに基づいて，各担当教師とイングリッシュ・センターが成績判定を行なった。試験結果の分析は後章で行う。

2020年度の後期授業は，本学ではこれをハイブリッド形式と呼んでいるが，学生と教師は，対面授業と遠隔授業を隔週にて実施した。学生と教師をAグループとBグループに分け，例えば，奇数週はAグループが感染予防策を講じた上で対面授業を実施し，Bグループは自宅または指定教室からZoomを使って遠隔授業を実施した。二つのグループに分けることにより，登校する学生と教員数を半数に抑える効果に加え，いつでも対面・遠隔の両形式に対応できる体制を備えることができた。実際に対面でも遠隔でも同じ目標を持ち，同じ形式で同内容の授業を運営できていたのかどうか，次に検証する。

５．イングリッシュ・センター教員による遠隔英語授業

イングリッシュ・センター教員が遠隔授業で使用している主なZoomの機能及び規則は次の通りである。

1) Camera: カメラは常時オンにする。教師と学生がカメラを常時オンにすることは，英語授業を対面授業と同様にインタラクティブなものとするために鍵となる要素だとイングリッシュ・センター教員は考え，徹底を図った。語学学習上の意図を説明し，全学生に理解させることが重要である。
2) Rename: 名前は英語でフルネーム表記する。これを毎回の授業で徹底することにより，教師は瞬時に学生を名前で呼びかけることができ，対話を始められる。ただし，学生は指名を待つことなくいつでも発言することができる。
3) Mute/unmute: 学生は通常はミュートにし，指名された時とブレイクアウトルーム内ではミュートを解除する。名前を呼ばれた学生は即座にミュート解除する動作に

慣れ，質問に答えたり意見を述べたりする。また，毎回の授業で全ての学生が少なくとも一回以上指名されるようにし，積極的な参加を促す。

4) Chat (Save chat): 教師と学生は頻繁にチャットでやり取りをする。学生は教師にいつでもメッセージを送ることができる。教師は授業中のチャットを保存する。ワンクリックで保存できるので，アンケート集計なども簡単に行える。
5) Breakout rooms: ブレイクアウトルームにて，ペアやグループで協働してタスクに取り組む。ブレイクアウトルームは，ペアワーク・グループワークの際に積極的に活用するのだが，「タスクが終了したときは自由におしゃべりしても良い」など声をかけたりすることにより, 学生がブレイクアウトルームセッションを好きになるよう働きかけることができる。
6) Ask for help: ブレイクアウトルーム中，いつでも学生は教師に助けを求めることができる。不具合が生じた時，質問がある時，達成したタスクを発表したい時など気軽に教師を呼ぶことができる他，保安上の不安を取り除くことができる。
7) Screen share: スクリーンシェア機能は教師のスライドを共有するためだけでなく，学生も使用できる。例えば，ライティングの授業では，学生自身が書いたものを学生間でピアチェックできたり, 教師に指導を受ける際にエッセイを提示したりすることができる。
8) Record: 簡単に授業の一部や全体を録画できる。録画機能は，スピーキングテストを評価する際に必要だが, その他にも欠席者がいることが予めわかっている場合や, 自身の授業を省察するため, あるいは同僚間で授業観察をしたり授業内の問題を解決したりする際にも役に立つ。

この他に, Zoom授業にまつわるトラブルを回避するため，一部の非常勤講師からの要請を受けて，‘Zoom Etiquette’のハンドアウトをイングリッシュ・センターで作成した（付録参照)。実際には全ての学生に配布したわけではないが，必要があれば各担当教師の判断で配布できる用意を整えた。

イングリッシュ・センター教員による典型的な授業は，図 1 のようなプロセスで進行する。最初に新たなコンセプトを導入し，解説する。例えば，ある日のリスニングの授業で学習するコンセプトは，connected speech（連続発音）である。動機付けを高めるための導入部分を経て大まかな説明を受けた学生は，次に実際にconnected speechを使った幾つかの活動を行い，それについてペアまたはグループで話し合う。そして，教師がフィードバックを与える。それを受けて，学生は個別，ペアまたはグループで練習を行う。このサイクルが授業では数回繰り返される。そして，このレッスン・サイクルは，対面授業においても遠隔授業においても同様であることがイングリッシュ・センター教員間で行った授業省察により発見された。

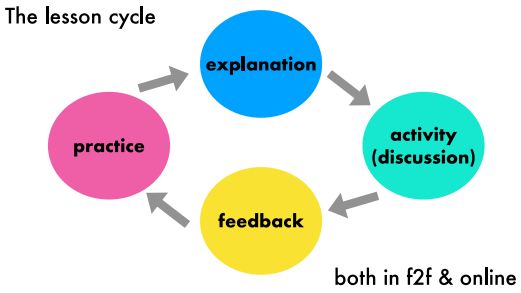


図１　レッスン・サイクル

６．客観的分析

客観的にイングリッシュ・センター教員による遠隔英語授業を分析するため，2020年度の遠隔授業を受講した学生の成績と前年度の学生の成績，他教科の同僚による遠隔授業観察レポート，遠隔授業を受講した学生のアンケート結果を用いる。成績分析の対象は表１の通りである。

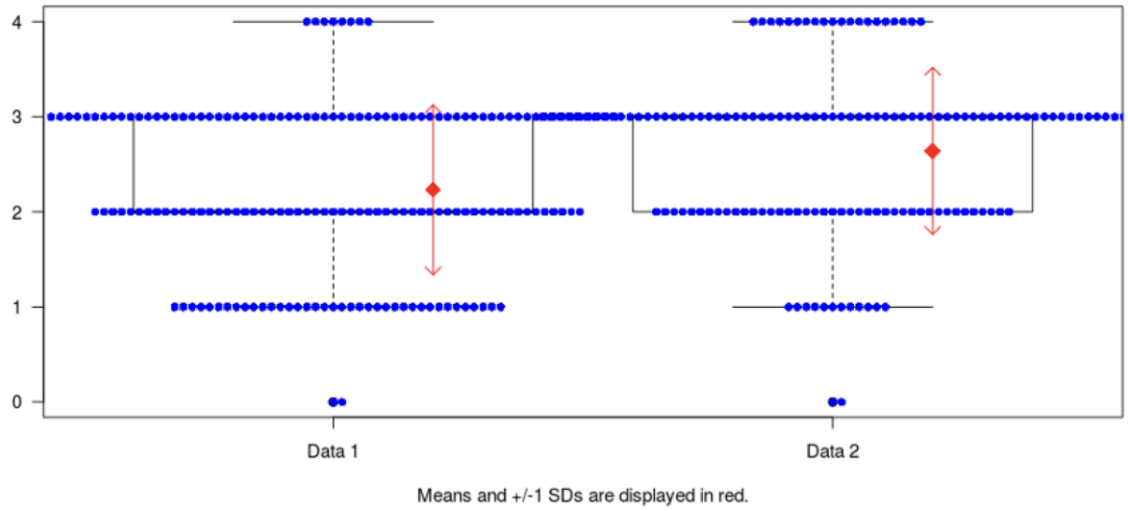
表１　成績分析の対象

年度学期	2019 年度 前期	2020 年度 後期
状態	通常時（教室）	非常時（在宅）
授業形式	対面	遠隔 (Zoom)
クラス数	5 クラス	5 クラス
科目内訳	スピーキング 2 クラス リスニング 1 クラス リーディング 2 クラス	スピーキング 2 クラス リスニング 1 クラス リーディング 2 クラス
学生数	169 名	142 名

学生の成績に関して，前年度と2020年度の平均に差があるかどうか，対応のないt検定を用いて確認した。成績分析の結果，成績の記述統計量はこのようになった。

$t(309)=-4.06$, $p<.01$, $d=-0.49$ (効果量: 中), 95% CI [-0.69, -0.24]

有意水準1%で成績の差は有意であることがわかった。2019年より2020年の成績が上である。効果量dは，Cohen (1988) の判断基準を参照したところ中程度であった。つまり，通常の対面授業時より遠隔授業時の方が学生の成績が良かったのである。図２を見ると，2020年の成績では，上位層が増え，さらに下位層の数が減っていることがわかる。



2019年　対面授業　　2020年　遠隔授業

図２　成績の分布

2020年4月1日に岐阜大学と名古屋大学が統合し，国立大学法人東海国立大学機構が設立されたことに伴い，岐阜大学の教育推進・学生支援機構に基盤教育センターが設立され，活動を開始した。その基盤教育センターの「コロナ禍における全学共通教育の役割とは」を考える企画に際し，副センター長の廣内大輔先生に遠隔授業の授業観察をしていただける機会を賜った。廣内先生による授業レポートを客観的なデータの一つとして用いるため引用する。

Zoomを使った遠隔英語教育が実現！

イングリッシュ・センターの島﨑治子特任准教授による英語３の授業を参観しました。この授業は，Zoomを用いたリアルタイム型のオンライン授業です。担当教員である島﨑特任准教授は，Zoomの特性を知悉し，それを存分に活用しています。

とりわけ，Zoomの機能の一つであるブレイクアウトルームを大変上手く活用しており，90分の授業のうち，４～５回ほど学生をブレイクアウトルームに移動させ，２人組または５～６人組でのグループワークをさせることで，実際に英語を発声させる機会をふんだんに設けた授業を実現しています。

また，たくさんの学生に対して繰り返し発問を行っており，単に講義を聴くだけのスタイルに終始することなく，学生に考えさせ，答えさせる双方向型・参加型の授業を実現できています。まさに遠隔授業のひとつのモデルケースとなる授業でした。

（廣内，2020，p. 3）

これは，イングリッシュ・センター教員である本報告の報告者による英語３（リーディング），教育学部１年生対象の遠隔授業を観察していただいた際の記録である。過分なお褒めを頂戴していることはさておき，自身の遠隔授業の進行方法や組み立てに関して新たな発見と再認識させられた点がある。全体的には，「Zoomの特性を活かした授業進行ができていた」「学生が英語を使う機会を多く設けていた」「双方向型・参加型授業が実現できていた」等の描写により，イングリッシュ・センターのねらい通りの授業が進行できていたことを確認した。そして，実際にブレイクアウトルームを開いた回数が４，５回もあったことは，自身が自覚していたより多いと感じた。ペアワークと小グループによる活動をタスクとして設定したことは意図的であるが，この授業に限っては，５～６人という大きめのグループを作っていたことは先生の報告を拝読し改めて気付かされたことであった。ブレイクアウトルームの回数が多く設定できているということは，多数の学生間のインタラクションが十分に確保できていたということである。また，授業毎のテーマに応じて，設定するグループの人数配分を柔軟に調整し，タスクに最適化することを遠隔授業においても実現できていることを改めて認識した。廣内先生は実際に90分間を通して授業に遠隔で参加し，学生と一緒にブレイクアウトルームにてタスクに取り組んで下さったので，学生からは「廣内先生と授業を一緒に受けることができて楽しかった」というチャットメッセージが届いた。

次に,別の日程で報告者が行った遠隔授業に対する学生の授業アンケート結果を用いて，反応を分析する。授業の最後の５～１０分間にZoomのチャット機能を使ってアンケート調査を実施した。質問は「このZoomを使った英語授業の学習効果について思うことを聞かせてください」という一問であり，アンケートの対象者は表２に示す。

表２　授業アンケートの対象

年度学期	2020 年度 後期
状態	非常時（在宅）
	遠隔（Zoom）
クラス数	４クラス
科目内訳	リーディング １クラス（教育学部） リスニング １クラス（工学部） ライティング ２クラス（工学部）
学生数	113 名

本アンケート結果を，KH Coder 3というテキストマイニングのアプリケーションを使用して分析した。図３にあるバブルの大きさは，語の頻出度を表している。緑の破線で囲ってある部分は，アンケートの質問項目である「主題」になる。

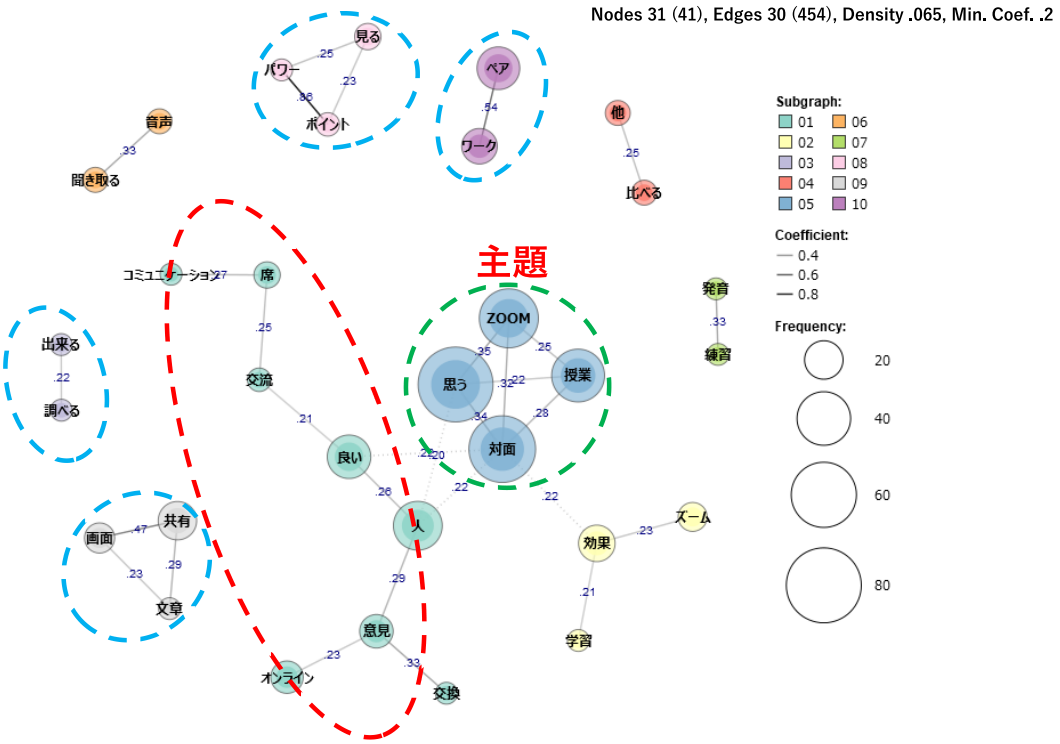


図３　共起ネットワーク分析

表３　授業アンケート内の頻出語

出現回数が上位10位までの頻出語

	抽出語	出現回数		抽出語	出現回数
1	思う	80	6	良い	26
2	対面	63	7	ペア	25
3	ZOOM	49	8	感じる	22
4	授業	39	9	共有	20
5	人	33	10	効果	18
総抽出語数		3,640 (1,563)	文	168	
異なり語数		535 (411)	段落	129	

次に，図３の赤い破線で囲った部分と青で囲った部分を個別に見ていく。赤で囲った部分は，「学習効果」を表した共起語のクラスターである。表３の頻出語と共に，実際の記述内容を参照しながら共起語の関係を紐解いていくと，コミュニケーションの際に席を移動せず，意見を交換できることが良いと学習効果を肯定的に見ていることがわかった。

青で囲った部分は，印象に残った活動の記述である。それによると，印象に残った活動は主に四つあった。それぞれの共起関係から次のことが示唆される。一つ目が「調べながらできる」，二つ目が「文章を画面で共有する」，三つ目が「パワーポイントを見る」，四つ目が「ペアワーク」という，これらの活動が学生たちにとってZoomを使った授業の活動において特に印象に残りやすいという特徴を表していると考えられる。

７．結果・考察

岐阜大学イングリッシュ・センター教員によってインタラクティブな授業が遠隔英語授業においても実施できているのかどうかの検証を行った。次に一項目ずつ考察を加える。

a) 言語使用の機会については，授業のねらいからも明らかではあるが，さらに同僚による授業観察により，インタラクションが豊富に確保できていたことが確認されたことからも学生による言語使用の機会は多いと言える。

b) 学習者の対話の質が改善されうるかどうかについては，学習者の対話の量自体が豊富であることから自ずと練習が繰り返されていることと，教師によるフィードバックが与えられているレッスン・サイクルが成立されていることにより，合理的な期待ができる。

c) 個別指導が促進されうるかどうかについては，個人的なフィードバックが個々の学生と教師間において，チャット機能を用いて授業中と授業の最後の振り返りの時間に与えられていることなどから期待できる。

d) 情緒的に安心できる雰囲気が作り出されているかどうかについては，ほとんどの学生が自宅で受講できていることから推測できると共に，学生による授業アンケートの記述に「良い」「意見」「交換」などの肯定的な言葉が表れていたことからも確信できる。

e) 学習者の動機を高められているかどうかは，学生による授業アンケートの反応において，学習効果に対し肯定感が強く表れていることと，実際の成績評価が前年度の通常の対面授業時よりも向上していることからも達成できていると言える。

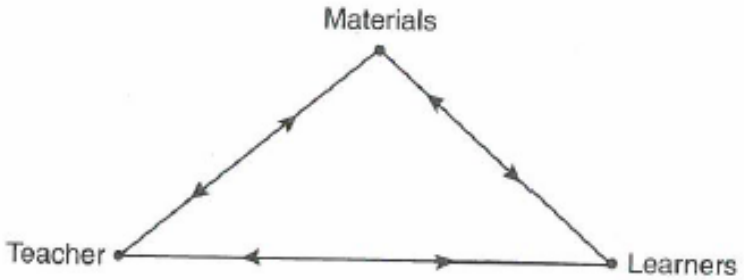


図４　Eternal Triangle (Bolitho, 1990)

英語教育研究では，学習者ひとりでは解決できない場合でも，グループのメンバーとのインタラクションを通し互いに補うことで課題を克服していくことができることに関心が注がれている（米田・小泉，2010）。教授・学習活動に活用される材料を一般的に教材と呼ぶが，その教材は学習者の観点からは学習材にもなる。教材や学習材というのは，指導者が教えるものや学習者が学ぶものであり，言い換えれば，Bolitho (1990) が図４に示すように，指導者と学習者，教材・学習材の三者の関係概念でもあることから，何かを教えたり学んだりする際，指導者と学習者にとって重要な要素となる。つまり，対面授業であっても遠隔授業であっても，よく練られた教材・学習材が存在する必要がある。そして，インタラクティブな遠隔英語授業に必要な要素は，教材・学習材，学習者の意欲・姿勢と教師の授業技術の三要素だと考えられる。

８．結論

岐阜大学イングリッシュ・センターは，統一性の高い全学共通英語教育プログラムを運営するため，教員間の学び合いの機会を多く設け，継続的に教材開発と授業研究を行っている。学生の意欲と姿勢を維持向上させるためには，遠隔授業においても，学生と教師間，学生間のインタラクションが対面授業と同様に重要であるということが，本報告の省察により確認された。Zoomの持つカメラ，マイク，チャットなどの便利な機能を駆使して教師が行う頻繁な声かけと学生のインタラクションを促進していくことにより，効果的な遠隔英語教育の実施は可能である。今後もICTを使いこなす教師の授業技術が要求され続けるであろう。そして，イングリッシュ・センターは，どんな時代においても岐阜大学の学生に質の高い英語教育を提供し続けることを求められている。

【参考文献】

Bolitho, R. (1990). An eternal triangle?: Roles for teacher, learners and teaching materials in a communicative approach. In Anivan, S. (Ed.), *Language teaching methodology for the nineties: Anthology series 24.* 22–30. Singapore: SEAMEO Regional Language Centre.

Cohen, J. (1988). *Statistical power analysis for the behavioral sciences* (2nd ed.). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.

Krashen, S. D. (1985). *The input hypothesis: Issues and implications*. London: Longman.

Long, M. H. (1983). Native speaker/non-native speaker conversation in the second language classroom. In Clarke, M., & Handscombe, J. (Eds.), *On TESOL '82: Pacific Perspectives on Language and Teaching*. Washington DC.: TESOL.

Long, M. H. (1996). The role of the linguistic environment in second language acquisition. In Ritchie, W. C., & Bhatia, T. K. (Eds.), *Handbook of second language acquisition*. 413–468. New York: Academic Press.

Long, M. H., & Porter, P. A. (1985). Group work, interlanguage talk, and second language acquisition. *TESOL Quarterly*, 19, 207-228.

樋口耕一 (2020)『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—第2版』ナカニシヤ出版

樋口耕一 (2004)「テキスト型データの計量的分析—2つのアプローチの峻別と統合—」『理論と方法』19(1), 101-115.

廣内大輔 (2020)「Zoomを使った遠隔英語教育が実現！」『岐阜大学教育推進・学生支援機構基盤教育センター教養教育NEWS』33, 3.

廣森友人 (2015)『英語学習のメカニズム: 第二言語習得研究にもとづく効果的な勉強法』大修館書店

米田みたか，小泉有加 (2010)「学習者中心の文法指導：グループワークの試み」『明治学院大学教養教育センター紀要』4(1), 237-248.

【付録】

Zoom Etiquette: Rules for Online English Classes

1. Join the class at least a minute before the start time so that the teacher can let everyone into the room with a single click. （授業開始１分前には入室）
2. Your camera must be on for the full lesson. The teacher needs to make sure you are participating. （カメラを常時オンにして授業に参加）
3. Remain in front of the camera for the full lesson. If you need to move away for any reason, send a message to the teacher using the Zoom chat feature to let them know. (You can message the teacher privately.) （やむを得ない理由により退席する際はチャット機能を用いて教師に連絡）
4. Dress and behave as you would in a regular class. (Do not eat!) （通常の対面授業と同様の服装・態度で受講）
5. Make sure that your "Zoom" name is your real name and that it is written in Romaji. (You can edit your name by clicking on it.) （本名を英文字で表記）